「Sky High」　(v01-27May2017)

Joe Hiroi

登場人物

譲司(ジョージ)：合鍵屋（兼探偵）　３５歳
健人（ケント）：ジョージの相棒・ヘアスタイリスト　３４歳
杏（アン）：フリーター・元弁護士・ケントとくされ縁　３６歳
ＢＵＧ（バグ）：ＰＣお宅・ハッカー　２５歳
ＢＯＳＳ（ボス）：謎の警察ＯＢ・ジョージの後ろ盾　年齢不詳
真山明：実業家（元暴力団構成員）　４９歳
真山ちあき：真山の妻・元レースクイーン　３８歳
高橋真一：真山の右腕・レストランオーナー　４４歳
白石：高橋の子分・ＩＴ会社社長　３３歳
久保：真山の運転手・元大手電気メーカー社員　３２歳
主婦：合鍵屋のお客さん　団地妻　４０代
刑事Ａ：ベテラン刑事　５０代
刑事Ｂ：新米刑事　３０代

●カフェ「ＢＵＧＳＹ」にて（深夜）
週末の夜、街はずれのカフェに集まる男女。
ジョージがカウンターでアンと裏仕事の話をしている。
アン：「詐欺師を騙すの？」
ジョージ：「政治家とつるんでジャブジャブなわけ」
アン：「そんな危ない橋渡らないわよ」
ジョージ：「ケントは乗るってよ。しかも今回は１０億のヤマだ」
アン：「、、、乗った」（しばし考えて即答）

そこへケントが気取った女を連れて入ってくる。
ジョージ、一瞬ケントと女に目をやるが、気にせずアンと話を続ける。

Ｘ　　Ｘ　　Ｘ

ケントは、連れの女に顔を寄せ、ささやくように話しかけ、女は微笑んだり、ケントの顔に優しく手を添えたり、いい雰囲気になる。
ほどなくケントはエスプレッソ１杯飲み干すと会計を済まし、女の腰に手をまわしながら

店を出て行こうとする。
その後ろ姿に声をかけるジョージ。
ジョージ：「ちょっと、そこのお二人」

そう言うと、ジョージはケントにメモをさりげなく渡す。
メモには「夏休みはみんなでフラミンゴへ」
ケントは軽く手を挙げてから、店を出る。

X　　X　　X

店の外、クルマの中で女（ちあき）がケントに話かける。

女（ちあき）：「あのひと知り合い？」
ケント：「さぁ」（知らないそぶり）
女（ちあき）：「ねぇ、シンガポール旅行、どうする？　マリーナベイサンズ、５つ星ホテルなんですって。　天空のプールでカクテル、最高じゃない？」
ケント：「どうするかな」（冷たい口調で）
女（ちあき）：「チケット取っとくね。　今日はお泊り？」（肩に顔を乗せて）
ケント：「、、、」（微笑）
ケントと女（ちあき）はケントの愛車プジョーに乗りこむと、闇夜に二人は消えていく。

●真山事務所（日中）
事務所の要所に仕込んである監視カメラを一つひとつ念入りにチェックする真山。
真山、バリっとしたシャツに艶のある高級そうな革靴を履き、整髪料で固めたヘアスタイルはやや昭和風。
真山は受話器を手に取り大声で話しだす。

真山：「先生、シンガポールのカネ、支払期日までになんとかしないと。申請書出してから、もう３か月も経ちましたよ、、、」
先生（声）：「まぁ落ち着きなさい。助成金なんてのは、そんなもんだよ。手続にはそれなりの時間がかかる。　お役所仕事なんだから」
真山：「先生、７月１日までに９億ですよ、９億。先生にとっちゃはした金でも、わたしにとっちゃ、大きな賭けなんですから、、、」（語気が強まる）
先生（声）：「分かった、分かった。ま、もう一回声をかけておこう。ソンタクってやつだ」

電話ごしに先生の笑い声が聞こえ、真山も愛想笑いをしながら電話をきる。
真山はそのままジャケットを羽織って、すぐさま外出する。

真山：「おい、久保！　出かけるぞ」
ソファーに寝転んでスマホをいじっていたが、真山の声に驚いて起き上がる。
久保：「あ、はい。　どちらまで？」
真山、不機嫌な顔つきで吐き捨てるように。
真山：「いいからさっさとクルマ回せ」
久保：「、、、すいません」

久保はクルマのキーを片手に持ち、慌てて部屋を出ていく。（途中つまずく）
その後を追いかけるように出ていく真山が事務所職員に声をかける。
真山：「おい、出かけてくる」
事務所職員一同：「いってらっしゃいませ！」（男ばかり声を揃えて高らかに）
真山が出て行った玄関先の事務所表札にクローズアップ。
（表札）「ＮＰＯ法人　国際雇用調整機構」「株式会社　アジア人材派遣センター」

●合鍵屋（夕方）
店内に設置してある数多くの監視カメラに次々とフォーカス。
そこへ近所の主婦らしきお客さんが合鍵を作りに来て、ジョージは丁寧に対応する。

主婦：「なんかね、どこ探しても見つからなくって」
ジョージ：「そうですか。それは大変でしたね」
主婦：「最近旦那がね、単身赴任だから、旦那の合鍵送ってもらったのよ」
　「最近物忘れがね、わたし更年期障害かしら」（鍵を片手に持ちながら）
ジョージ「すいません、それで、その鍵、見せてもらえますか？」
主婦：「あら、無駄話しちゃって。忙しいところ、ごめんなさいね」
ジョージ：「いえ、仕事ですから、、それで鍵いくつ作りますか？」（渋い表情作る）
主婦：「1本でいいかしら、、でも2本にしとくわ、念のため」

主婦は照れ笑いしながら軽く挨拶をして立ち去る。
ジョージは直ぐに店の奥で合鍵のサンプル帳を開き、何本もの複雑なカギを照合する。
するとジョージのスマホが鳴った。

バグ（声）：「商売繁盛してるじゃないですか」（嬉しそうに）
ジョージ：「お陰様でね。事務所の鍵に、金庫の鍵に、レストランの鍵、、」

「見たことねーよーな複雑な鍵ばっかりだ。相当なワルだぞ、こいつは」
バグ（声）：「ワルにはワルをってね。上がるわー」
ジョージ：「おい、問題は送金だ、どうする？」
バグ（声）：「それ、ずいぶん昭和な心配だな。世の中デジタルマネーの時代だよ」
ジョージ：「デジタル？　なんだそれ、分かるように説明しろ」
バグ（声）：「ビッドコイン使えば、スイス銀行より安全ってこと」
ジョージ：「そうか。よくわかんねぇが、頼んだぞ。失敗すんじゃねーぞ」
バグ（声）：「今度のヤマ、ロト６・１０億円、でしょ？」
ジョージ：「でかいことになるな」
バグ：（声）：「イエーィ　ヒョー！」（奇声）

そこへさっきの主婦が戻ってくる。
店内に設置してある数多くの監視カメラに次々とフォーカス。

バグ（声）：「ジョージさん、その年増女、大好物でしょ？」
ジョージ：「覗いてんじゃねーぞ、小僧」（小声）
バグ（声）：「団地妻シリーズだ、趣味ワル！」
ジョージ：「るせーんだよ、ボケ」（小声）
ジョージ、電話を切り、主婦に笑顔で応対する。

主婦：「あのーもう出来たかしら？」
ジョージ：「あ、奥さん、すいません、今やってるところでして」（また渋い表情作る）
主婦：「そうよね、ごめんなさいね、急がせちゃって」
ジョージ：「お住まいお近くですか？　もし良かったらお宅までお届けしましょうか？」
主婦：「、、そう？　じゃ、そうしてもらおうかしら」
ジョージ：「住所と携帯番号、ここに書いてもらえますか？」（上目使い）
主婦、ノートに書きながら、顔色がほんのりが赤らむ。
ジョージ、かがんだ主婦の胸元を見つめてから、監視カメラに向かい思わせぶりな笑顔。

●レストランにて（夜）
雰囲気のあるレストランの個室、大きなテーブルを囲んで、真山らが食事をしている。
そこに黒いスーツの淡麗な女性マネージャー（アン）が現れる。

マネージャー（アン）：「アワビのワイン蒸し・伊勢海老のテリーヌ添えでございます」
「お取り皿に取り分けましょうか？」

真山：「あぁ、そうしてくれる？」
マネージャー（アン）：「かしこまりました」（手際良く取り分ける）

X　　X　　X

美味しい料理に満足したのか、真山はじょうぜつになる。
真山：「ちあき、お前最近機嫌いいじゃないか」
（回想）ホテルのロビーでたわむれるケントとちあき
ちあき（声）：「機嫌良くしてた方がいいでしょ」（甘えた口調）
（回想）プールサイドで日差しを浴びているケントとちあき
真山（声）：「何かいいことあったか？」
（回想）間接照明に照らされるホテルの１室でベッドに横たわるケントとちあき）
ちあき：「わたし海外旅行で機嫌良くなるのよ。　安いもんでしょ」
「あなたも来れば良かったのに、、、」（髪を触りながら）

X　　X　　X

そこへオーナーである高橋真一が個室に現れる。

高橋真一：「真山さん、お口にあいますか？」
真山：「おー、真一。いいじゃないか。料理も旨いし、従業員も気が利くし」
ちあき：「真一さん、さすがよね。あなたのお店、はずれがないもの」
「何件目なの？　ここも繁盛してるんでしょ？」
高橋真一：「ありがとうございます。お陰様でそれなりにうまくいってます」
真山：「ところで真一、シンガポールの件、どうなってる？」
高橋真一：「えぇ、順調に進んでますが」（白石に目配せする）
白石、高橋の視線を察して。
白石：「えーと、先週ですね、姐さんと一緒に飛びましてですね」
ちあき：「白石！　だからわたしのこと、姐さんって言うの止めてくれる？」
白石：「、、、ちあきさんとご一緒に、ＪＡＬのビジネスでシンガポールに参りまして」
真山、白石の発言で少し不愉快な表情になり、それを見て高橋が白石を叱る。
高橋真一：「白石、だから手短に結果だけ報告しろ！」
白石：「えぁ、すいません。営業許可は申請中でして、、、」
真山：「分かった、真一。今月中に許可だけは取っとけよ」（気を取り直して）
高橋真一：「はぃ」（真山の言葉にほっとする）

X　X　X

真山：「白石、お前、学校で国語勉強したか？」
白石：「真山さん、おれ国語は得意科目で、今、携帯小説書いてます」
高橋真一：「どんな小説だ？」
白石：「あの、言っていいですか？　姐さんとシンガポール行った話ですけど」
ちあき：「おぃ！　誰が許可した？　あ？」（ヤンキーの鋭い目つきに豹変）
一同爆笑するが、久保は末席で終始下を向いて黙々と食事をしている。

X　X　X

高橋真一はひとまず個室を出ると、マネージャーを呼び寄せる。
高橋真一：「いいな、大切なお客様だから、失礼のないように」
マネージャー（アン）：「はい。　かしこまりました」
高橋真一：「君には期待してるからね」
マネージャー（アン）：「はぃ、、、」
高橋真一：「ところで今日は何時上がりだっけ？　ラストまでいるの？」
マネージャー（アン）：「今日は早番で失礼させて頂こうかと」
高橋真一：「そう。今度ゆっくり話そうか」
　「僕は君みたいに優秀な女性を放っておけないタチでね」
高橋は、さりげなく腕のあたりをスーッと指で撫で、その場を立ち去る。
マネージャー（アン）はその場で軽く会釈し、高橋に意味ありげな微笑みを返す。
店内に設置してある監視カメラのアップ。
「Zizi　Zizizi 」（作動音）

●交番にて（朝）
うつろな目をした久保が交番の前に茫然と突っ立っている。
久保の顔色は青ざめ、思いつめた表情に余裕はない。

●ファッションホテルの部屋で
いつものように情事を重ねるケントとちあき
部屋に入るなり我慢しきれず、服を着たまま抱き合いキスを重ねる。
ちあき：「ねぇ、あたしのこと好き」
ケント：「あぁ、好きだよ」

ちあき：「ほんとに？」
設置してある監視カメラにフォーカス。

●レストラン奥の社長室で
高橋真一がマネージャー（アン）を呼び寄せ、親しげに話を始める。
高橋真一：「僕は大人の遊びをたしなみたいタチでね。もちろんビジネスはけじめは大切だから、公私混同はしない」
マネージャー（アン）：「えぇ」（肯定も否定もせず）
高橋真一：「いわゆる大人の契約、というかね。もちろん、それなりの報酬もね」
高橋真一は部屋にあるワインを２つのグラスに丁寧に注ぎ、マネージャーに手渡す。
アンはソファに座ったままでグラスを受取る。
その時アンの携帯にメッセージの着信があり、アンはチラッと目を移す。
メッセージには「高橋真一の生年月日、至急送って。バグ」
アンは何事も無かったようにグラスに口を添えて微笑む。

●警察署にて（正午頃）
取り調べ室のような一室でうなだれてパイプ椅子に座る久保。
その傍らに私服の刑事が付き添っている。
設置してある監視カメラにフォーカス。

●機器類で埋もれた狭い部屋で
一心不乱にＰＣのキーボードを叩きまくるバグ。
正面に置かれた複数のモニターには難解な言語の羅列が続く。
その時１台のスマホに着信。
バグ：「なに？」
ジョージ（声）：「おぃ、どうなってる？　もう１時間切ったぞ」
バグ：「だからー、いまやってるって。もうちょっと待っててよ」
ジョージ（声）：「警察が動いたって、ボスから情報が入った、そろそろやばいぞ」
バグ：「忙しいから切るよ！」
バグ、溜息をつきながらメガネを直し、再び作業を再開する。（不機嫌そうな顔）
脇に置いてあるデジタルクロックが時を刻む「６月３０日　２３：１６、、」

●ファッションホテルの部屋で
（二人の情事続き）
ちあき：「ねぇ、抱きしめて、強く」
ケント：「、、、」（両腕で力強く抱きしめる）
ちあき：「何でもしてあげるから、言って、ねぇ、何が欲しい？」（切ない声）
ケント：「君と一緒にシンガポールで暮らしたい」（ささやく）
ちあき：「、、、ケント、、、」（ケントを見つめて）
「あたしのことも、シンガポールのことも、全部教えてあげる」（強く抱きつく）
部屋の時計が時を刻む「２３：３１」

●レストラン奥の社長室で
（高橋真一とマネージャー会話の続き）
マネージャー（アン）：「ひとつだけ質問してもよろしいですか？」
高橋真一：「ということは、契約成立かな？」
マネージャー（アン）：「えぇ、でも私、苦手な星座の方がいまして」
高橋真一：「ほう？　君みたいな知的なひとが占いを？」
マネージャー（アン）：「失礼ですけど免許証、拝見できますか？」（見つめるように）
高橋真一：「、、、君も疑い深いんだな。いや、慎重な性格というべきかな」
高橋は、苦笑しながら免許証を提示、それをじっと見つめるアン。
マネージャー（アン）：「、、、ちょっと失礼しますね」（微笑）
スマホを取り出し、アンがラインで情報をインプット、スマホの時刻表示は「２３：４７」

●機器類で埋もれた狭い部屋で
デジタルクロックの時刻「２３：５３」
バグ、床にころがっている何台ものスマホにも頻繁に目をやっている。
真山や事務所関係、高橋真一、ちあきなどの周辺情報が次々と送信されてくる。
複数の監視カメラから送られる膨大な映像を同時にチェックしているバグの目が血走る。
デジタルクロック「２３：５６」
ようやく全ての作業を終える、おもむろにＰＣのキーボードを手に取る。
デジタルクロック「２３：５８」
両目をつぶり、両手を胸の前に合掌し、ひとりごとのように呪文を唱える。
１回だけゆっくりと深呼吸をしてから、最後にＥＮＴＥＲキーを勢い良く叩く。
スマホの画面でビッドコインの入金を確認。
バグ：「ゲーム終了！」（その場にひっくり帰る）

デジタルクロックの時刻「２３：５９」そして「００：００」

●真山事務所前（夜）
複数のパトカーに分乗した刑事や警察官が息をひそめ待機している。
刑事が携帯電話での通話を終え、腕時計をみながら無線で指示を出す。
刑事Ａ：「これから容疑者真山および関係者の確保する、準備いいか」
「午前０時０５分、執行！」
刑事の合図で待機していた警察関係者が一斉に事務所へとなだれ込んでいく。

●ファッションホテルの前（深夜）
タバコをくわえたケント、スマホでビッドコインの入金を確認。
吸い終わると愛車プジョーにひとり乗りこむ。
エンジンを始動して、何事も無かったようにプジョーは闇夜に消えていく。

●レストランの前（深夜）
アン、スマホでビッドコインの入金を確認。
ゆっくりハンドバッグから口紅を取り出し、ルージュを引き直す。
深夜、流しのタクシーを呼び止めると腰から滑り込み、そのまま走り去る。
途中、レストランへと急行する何台もの赤色灯の回るパトカーとすれ違う。

●団地の一室で（朝）
翌朝、鉄扉をノックする音で目を覚ますジョージ。
隣で寝息を立てている主婦は裸のまま熟睡している。
ジョージは眠い目を擦りながらジーンズを履き、ゆっくり扉を開ける。
刑事Ｂ：「ジョージさん？」
ジョージ：「はい」
刑事Ｂ：「ちょっとお話を伺いたいのですが、ご同行頂けますか？」
ジョージ：「はぁ」（寝ぼけたまぬけ顔）

●カフェ「フラミンゴ」（夕方）
夏の西日が差し込む沖縄の街角。

しゃれた夏服の大人の男女が楽しそうに話している。
ケント：「永い夏休みの始まりだな」
アン：「わたし、パリで暮らすことにしたわ。気が向いたら遊びにきて」
ケント：「パリか」（サングラス越しに笑顔）

そこに金髪でアロハシャツの浮かれた若者が元気よく入ってくる。
バグ：「おひさしぶりですー」
ケントとアンは親密そうな会話を一端止めて、バグに視線を移す。
バグ：「、、、あれ？　ジョージさんは？」
ケントとアン、顔を見合わせる。
ケント・アン：「さぁ」（笑いながら）

●警察署にて（夕方）
取調室で尋問を受けるジョージの横、携帯電話で話す刑事。
刑事Ａ：「そう言われましても、、、」
ボス（声）：「あいつは関係ないんだから、出してもらえるかな」
刑事Ａ：「まいったなぁ。ボスにそこまで言われちゃ、、、」（頭を掻きながら）
「えぇ、、、分かりました、、、はぃ、、、」

Ｘ　Ｘ　Ｘ

取り調べ室から出てくるジョージ。
階段を下りると主婦がロビーの隅でジョージを待っている。
ジョージ：「奥さん」
主婦：「、、、ごめんね、私が悪いことしたから」
ジョージ：「そうじゃない、悪いのは旦那の方だ」（薄笑い）
主婦、ジョージに抱きつく。
主婦：「わたし、ジョージさんについていきます」（きっぱり）
「、、、南の島でも、どこでも、、、」（聞こえないほどの小さな声で）
主婦は監視カメラに向かって、誰も気づかない程だが、微かに笑みを浮かべる。

完